

令和7年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢錦丘高等学校

【重点目標1】中高一貫教育校の特長を生かし、将来を見据えた進路目標に向かって、意欲的・主体的に取り組むことのできる生徒を育成する。																
具体的取組	主担当	評価の観点	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)											
① 中高一貫教育校として6年間を見通した進路指導や学習指導を行うとともに、その成果を全校に波及させる。	教務課	【努力指標】 6年間を見越した到達目標を明確にし、中高の教員が連携して、生徒の進路目標の実現を図る。	「中高一貫教育校として、6年間を通じた教科における指導方針や指導方法の共通理解と実践に取り組んでいる」と思う教員の割合が A 60%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である	職員アンケート(12月) 肯定的回答 73.1% 当てはまる 30.8% やや当てはまる 42.3% 【判定：A】 昨年同期：74.6%	肯定的に回答した教員は73.1%で、昨年度同時期の74.6%からはやや減少したものの、多くの教員が引き続き前向きに捉えている。その背景には、互見授業や公開授業による中学校の授業参観の機会や、ブリッジ授業・紫錦祭などの中高合同行事を通じて、教員が連携する場が継続的に設けられていることが挙げられる。加えて、総合的な探究の時間に中高合同で実施している「課題研究テーマ交流会」の成果も大きい。 次年度も、中学3年生と協働する課題研究を柱とし、その成果を外進生にも波及させながら、中高一貫教育校としての取組を一層推進していきたい。											
	各教科	【努力指標】 錦丘中とも連携した研究授業や互見授業を通して、授業改善に繋げるために、授業を参観する機会を多く設ける。	「他の教員の授業を参観したり、自分の授業を参観してもらった上で意見を伺ったりして参考になったと思える回数が、錦丘中の参観を含め、年間3回以上あった」と回答した教員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	職員アンケート(12月) (参考) 3回以上 75.0% 2回以上 9.6% 1回以上 9.6% 0回 5.8% 【判定：A】 昨年同期：54.2%	昨年度同時期と比較して、「3回以上」と回答した教員の割合が大幅に増加した。昨年度に引き続き、自身の担当教科にとどまらず、中学校も含めた他教科の授業を参観するよう促してきたことが、その要因の一つであると考えられる。教員自身も、他の教員の授業を参観することを通して、自らの授業を振り返る機会を大切にする必要がある。互見授業を通して「参考となった点」について報告を求めたところ、授業改善の視点として「発問の工夫」を挙げる回答が多く見られた。次年度は、「発問を工夫する」ことを意識し、課題設定や発問の在り方について各教科で意見を交わす場を設けることで、授業改善につなげていきたいと考えている。											
	教務課	【成果指標】家庭学習の定着 <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <thead> <tr> <th>学年</th> <th>平日</th> <th>休日</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1年</td> <td>2時間</td> <td>4時間</td> </tr> <tr> <td>2年</td> <td>2.5時間</td> <td>4時間</td> </tr> <tr> <td>3年</td> <td>3時間</td> <td>総体前 5時間 総体後 8時間</td> </tr> </tbody> </table>	学年	平日	休日	1年	2時間	4時間	2年	2.5時間	4時間	3年	3時間	総体前 5時間 総体後 8時間	平日における家庭学習の目標時間を達成している生徒の割合が A 60%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である	学習時間調査(11月) □内は昨年同期 全体 52.0% 【37.0%】 1年 53.4% [19.6%] 2年 35.7% [23.2%] 3年 71.8% [69.2%] 【判定：B】
学年	平日	休日														
1年	2時間	4時間														
2年	2.5時間	4時間														
3年	3時間	総体前 5時間 総体後 8時間														
② 中学校との情報交換や指導記録も適切に踏まえ、学級担任や学年主任等による積極的な面談を行う。	各学年	【満足度指標】 面談を通して、生活や学習に関して、きめ細かく指導を行うことで、学習面での積極性や主体的に進路を選択する姿勢が向上する。	「ホーム担任や教科担任との面談によって、自分の学習姿勢や進路選択に良い変化が生まれた」と思う生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	生徒アンケート(12月) 肯定的回答 85.0% 当てはまる 41.7% やや当てはまる 43.3% 【判定：A】 昨年同期：82.0%	「ホーム担任や教科担任との面談によって、学習姿勢や進路選択に良い変化があった」と回答した生徒は85.0%で、昨年度同時期の82.0%を大きく上回った。特に「当てはまる」と回答した生徒の割合が36.7%から41.7%へと増加しており、丁寧な面談を通して、ホーム担任や教科担任との信頼関係が構築されていることの表れであると考えられる。今後も教員間で情報共有を図りながら、一人ひとりに応じた支援を継続していきたい。											

具体的取組	主担当	評価の観点	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
③ 生徒自らが設定した進路目標の実現に向けて、学習意欲の向上を図るとともに、教員のサポート体制を強化する。 また、課題や悩みを抱えた生徒に対しては、教職員が連携し、自発的解決に向けて支援する。	進路指導課	【成果指標(生徒)】 生徒が志望する「なりたい自分」と卒業後の進路が、学問領域等において一致している。	3年次4月の進路志望調査と卒業時の進路を比較し、その学問領域等が一致している割合が A 65%以上である B 55%以上である C 45%以上である D 45%未満である	大学や学部まで一致する生徒も多いが、大学が異なっても学部や学科など学問領域まで一致する生徒が72.6%と比較的高い数値となった。 【判定：A】	今年度も、進路希望と入学後のミスマッチを防ぐことを目的に、金沢大学や早稲田大学の担当者を招いた校内大学説明会を実施した。加えて、本年度は福井大学や上越教育大学による説明会も新たに実施し、学問分野や大学の特色について、より具体的に理解を深める機会を提供した。昨年度と同様に、第一志望への挑戦を最後まで支える姿勢を重視し、担任による個別面談の充実を図っている。今後も、夏期補習に加え、日常の学習指導を含め、生徒一人ひとりの進路実現に向けた支援を継続していく。
	進路指導課	【成果指標(生徒)】 学習習慣を身につけ、成績を伸ばしている。 *進研模試(7月と1月、もしくは11月)の全国偏差値の比較	年度内に成績を伸ばした1年生が A 180名以上である B 160名以上である C 140名以上である D 140名未満である 年度内に成績を伸ばした2年生が A 120名以上である B 100名以上である C 80名以上である D 80名未満である	外部模擬試験(7月→11月) 3教科(国数英)合計の全国偏差値が上昇した生徒数 []内は昨年同期 1年生 170名 [181名] 【判定：B】 2年生 112名 [125名] 【判定：B】	成績向上を図る取組として、キャリア教育の充実に努め、職業や受験に関する情報を継続的に発信している。また、外部模試実施後は、結果が届き次第、その分析を迅速に教員間で共有し、昨年度以上に授業改善や個別指導に活かす体制を整えている。一方で、1年生では受験した生徒の過半数に成績向上が見られたものの、2年生、とりわけ数学においては基礎力の定着が不十分で、昨年に引き続き苦戦している状況が見られる。なお、各教科別の成績向上者数は次のとおりである。 1年生 国語144名、数学173名、英語199名 2年生 国語154名、数学119名、英語124名 次年度も、生徒が主体的に学習に取り組めるよう進路目標を明確にさせるとともに、基本的な生活習慣の確立や、予習・授業・復習の学習サイクルを重視した支援を継続していきたい。
	保健・相談課	【成果指標】 早期に連携して、生徒の課題や悩みに対応しようとする教員の数が増加する。	「関係教職員の情報共有により、問題を抱えた生徒を早期に把握し対応している」と思う職員の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	職員アンケート(12月) 肯定的回答 92.3% 当てはまる 57.7% やや当てはまる 34.6% 【判定：A】 昨年同期：97.8%	肯定的評価の割合は昨年度同時期と比べて低下したものの、これまでどおり職員会議や運営委員会での情報共有に加え、スクールカウンセラーや外部機関との連携を含めた取組を継続していく。教職員からの情報収集体制も着実に構築されつつあることから、今後は問題を抱える生徒のより一層の早期把握を図るとともに、効果的な指導や関わり方について継続的に検討する。あわせて、校内研修等の企画も含め、よりよい支援体制の構築を目指していく。

【重点目標2】 様々な教育活動の場面を通して、論理的思考力を伴ったコミュニケーション力や表現力の向上を図るとともに、これからの社会の変化にたくましく、しなやかに対応でき、明るく元気で礼儀正しく行動できる生徒を育成する。

具体的取組	主担当	評価の観点	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
① ICTの効果的な活用やアクティブラーニングの手法を取り入れながら授業研究に取り組み、生徒に基礎的・基本的な事項を確実に習得させるとともに、論理的思考力や表現力の育成を図る。 また、各教科の特質を踏まえた言語活動を通して、「コミュニケーション力」の育成を図る。	各教科	【努力指標・満足度指標】 ICTの「効果的な」活用方法について学校全体で検討し、実践に繋げる。	「授業理解や学力向上のために、ICT機器やプリントなどが工夫されている」と思う生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	授業評価(12月) 肯定的回答 84.5% 当てはまる 54.9% やや当てはまる 29.6% 【判定：A】 昨年同期 82.0%	肯定的回答は84.5%で、昨年度同時期の82.0%をやや上回った。昨年度より、授業評価と併せて生徒を対象にICTの効果的な活用方法について具体例を調査しており、その事例を共有することで、各自がICTの活用を振り返り、より効果的な活用方法を模索していきたい。
	各教科	【満足度指標】 思考を揺さぶる学習活動やどんな力を身につけたのかの振り返り(リフレクション)を取り入れ、論理的思考力や判断力、表現力を育てるとともに、自ら課題に向き合うことで、考え抜く探究力を育てる場面が増える。	「授業の中に思考を深める場面がある」と思う生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	授業評価(12月) 肯定的回答 89.5% 当てはまる 58.3% やや当てはまる 31.2% 【判定：B】 昨年同期 89.4%	肯定的回答は89.5%で、昨年度同時期の89.4%と同様に高い水準を維持している。各教科において、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が継続して行われていることがうかがえる。互見授業の振り返りにおいても指摘があったとおり、教師の発問の質は、生徒の思考を深める学習活動に大きく関わっている。今後は、生徒の振り返りを踏まえた課題設定の工夫と、教師の発問を通じた思考力・表現力の育成を一層重視していきたい。
	生徒課	【成果指標】 教職員の積極的な声掛けや生徒会や部活動を中心とした挨拶運動により、積極的に挨拶ができる生徒の数が増加する。	「校外からの来校者にも積極的に挨拶している」生徒の割合が A 70%以上である B 50%以上である C 30%以上である D 30%未満である	生徒アンケート(12月) 肯定的回答 86.5% 当てはまる 43.4% やや当てはまる 43.1% 【判定：A】 昨年同期 86.3%	本校への来校者に対して積極的に挨拶をしている生徒の割合は86.5%で、昨年度同時期の86.3%とほぼ同水準を維持している。さらに、「当てはまる」と回答した生徒の割合は3.2%増加した。恒例となっている部活動による挨拶運動や教員による登校指導、全校集会での呼びかけに加え、部活動の部長会議においても挨拶の重要性を呼びかけてきたことが、その要因の一つであると考えられる。次年度においても、今年度の取組を継続するとともに、挨拶を通じた良好な人間関係づくりをさらに充実させていきたい。
② 総合的な探究の時間だけでなく、全ての教科、部活動、生徒会活動などにおける探究的な学びを通して、自分の強みを生かしながら、自らのキャリアを形成していこうとする態度を養う。	探究未来課	【成果指標】 学校での全ての教育活動を通して、自分の強みや得意を認識し、自分の在り方・生き方について考えている生徒の数が増える。	「探究活動を含む全ての教育活動を通して、自分の得意なことや強みを伸ばしたり、新たに発見できたりした」と思う生徒(1、2年生)の割合が A 60%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である	生徒アンケート(12月) 肯定的回答 78.6% 当てはまる 28.7% やや当てはまる 49.9% 【判定：A】	肯定的に回答した生徒は78.6%で、7月の結果と比較して6.9%増加しており、7月よりもさらに良好な結果となった。2学期は、1・2年生ともに探究活動が本格化し、フィールドワークなど探究を深めるための行事が複数実施されたことが、肯定的な回答の増加につながったと考えられる。一方、内訳を見ると、「やや当てはまる」の割合は7月の結果と比較して6.2%増加しているが、「当てはまる」の割合は同0.6%増にとどまり、ほぼ横ばいであった。今後も、あらゆる教育活動を通して、生徒が自分の強みや得意を認識できるよう、継続して支援していきたい。

<p>③ 担任・部活動顧問との面談等を通じて、生徒が時間を有効に活用できるよう支援を行い、学習・生活全般の充実を図る。</p>	<p>生徒課</p>	<p>【成果指標・満足度指標】 部活動と勉学の切り替えがうまくなされて、日々の生活にメリハリのある生徒の数が増える。</p>	<p>「部活動と勉強の時間をうまく切り替えて過ごせている」と感じる生徒（1、2年生）の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である</p>	<p>生徒アンケート(12月) 肯定的回答 71.0% 当てはまる 31.8% やや当てはまる 39.2% 【判定：A】</p>	<p>本項目は今年度からの「新設問」であり、後期の肯定的回答は71.0%と、前期の69.8%からわずかに上昇している。取組としては、完全下校時間の徹底により学習時間の確保を図るとともに、部長会議を通して、部活動終了後の行動を早めるよう継続して呼びかけている。 次年度についても、部活動の効果的かつ効率的な運営を推進し、部活動と学習の両立を一層促進していきたい。</p>
<p>④ 近隣6校と連携した防災教育に関する取り組み等を通じ、生徒の防災意識を高める。</p>	<p>総務課</p>	<p>【成果指標】 防災教育活動計画に基づく取り組みの結果、防災への意識が高まる生徒の数が増える。</p>	<p>「防災意識が高まった」と感じる生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である</p>	<p>生徒アンケート(12月) 肯定的回答 75.4% 当てはまる 27.6% やや当てはまる 47.8% 【判定：C】</p>	<p>防災意識が高まったと肯定的に回答した生徒は75.4%で、7月と比較して8.2%上昇した。避難訓練を通してその重要性を再認識させるとともに、日常的な危機管理意識を高めることが、肯定的な回答の増加につながったと考えられる。一方で、防災意識を一過性のものでせず、継続的に高めていくことが課題である。 次年度は、避難訓練の実施時期を早め、各課やホーム担任と連携を図りながら、年度当初から防災意識の向上に取り組むことで、年間を通して「防災意識が高まった」と感じる生徒の割合がさらに増加するよう努めていきたい。</p>

【重点目標3】教職員一人ひとりが組織的・効率的な業務の遂行に努めるとともに、日頃から危機管理の意識を高め、保護者や地域に信頼される学校づくりを推進する。

具体的取組	主担当	評価の観点	達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)及び後期の対応
① 時間外勤務や会議時間の短縮、効率化に学校が一丸となって取り組み、多忙化改善に向けた教職員の意識改革を行う。	総務課 管理職	【成果指標】 業務の効率化やタイムマネジメントに関する意識を強く有する教職員の数が増える。	「業務の効率化やタイムマネジメントに関する意識を高めた」と考える教員の割合が A 95%以上である B 90%以上である C 85%以上である D 85%未満である	職員アンケート(12月) 肯定的回答 86.5% 当てはまる 44.2% やや当てはまる 42.3% 【判定：C】 昨年同期 91.5%	業務の効率化やタイムマネジメントに関する意識が高まったと肯定的に回答した教員の割合は、R7前期とほぼ同水準であった。一方で、昨年度同時期と比較すると約5%減少している。校務のDX化は着実に進展していることから、これらを業務の効率化やタイムマネジメント意識の向上につなげるため、今後も各分掌において業務改善の工夫を継続的に進めていく必要がある。
② 近隣6校と連携した防災教育に関する取り組み等を通じ、教職員の防災意識を高める。	総務課	【成果指標】 防災教育活動計画に基づく取り組みの結果、防災への意識が高まる教職員の数が増える。	「防災意識が高まった」と感じる教職員の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	職員アンケート(12月) 肯定的回答 88.5% 当てはまる 46.2% やや当てはまる 42.3% 【判定：B】	教職員の「防災意識が高まった」と肯定的に回答した割合は88.5%で、7月の調査時から7.3%減少した。7月の調査は避難訓練実施後に行われており、学校管理危機マニュアルの共有やシェイクアウト訓練への参加、中学校との合同避難訓練を通して、防災意識が高まっていたことが要因であると考えられる。一方で、年間を通してその意識を維持・向上させていくことが課題である。今後は、防災に関する情報共有を継続的に行うことで、教職員の防災意識の定着と向上を図っていきたい。
③ 学校HPや学年通信、各種便り等を通して保護者に学校の様子を伝えるとともに、PTA活動や学校行事への参加拡大を図り、家庭との連携を強める。	総務課	【成果指標】 学年通信のほかに、学校HPや各種だより等も有効に活用することで、保護者や地域の方々が目にする機会が増える。 【成果指標】 行事に参加する保護者の数が増加し、延べで1,000人以上を目指す。	「学校のHPや学年通信、行事案内など、学校からの情報を見ている」保護者の割合が A 80%以上である B 75%以上である C 70%以上である D 70%未満である	保護者アンケート(12月) 肯定的回答 76.5% 当てはまる 26.7% やや当てはまる 49.8% 【判定：B】 昨年同期 77.9%	昨年度同時期と比較して肯定的回答は1.4%減少し、評価はB判定であった。肯定的回答の割合は、ここ数年60%後半から70%前半で推移しており、今年度も70%後半の水準を維持している。学校ホームページにおいて情報の集約を進めるとともに、各種案内についてはメールでの連絡と併せて周知するなど、情報提供の工夫を行ってきた。次年度についても、今年度の取組を継続しながら、ホームページのさらなる充実を図り、情報発信の一層の充実に努めていきたい。
			P T A主催の行事に参加する保護者の数(延べ数)が A 1,000人以上である B 800人以上である C 600人以上である D 600人未満である	各行事における参加者数を集計 12月末現在 802名 【判定：B】 昨年同期 840名	昨年度同時期と比較して参加者数は38名減少し、評価は昨年同様B判定となった。 【分析】例年どおり、「保護者のための進学講座」は参加者が多く、好評であった。一方、「グッドマナーキャンペーン」は、例年4日間の開催であったが、今年度は行事の見直しと天候不良により1日の実施となったことから、1日開催・参加者11名にとどまり、全体の参加者数減少につながったと考えられる。 【次年度の取組】次年度も6月に「保護者のための進学講座」を実施するとともに、その他の行事についても実施時期や情報発信の方法を工夫し、より多くの保護者が参加できるよう努めていきたい。

<p>学校関係者評価委員会の評価</p>	<p>【進路希望調査について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年度末に判定が出る評価項目について、最終結果がいつ閲覧できるのか分かりにくい。 <p>【探究活動について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本年度の探究発表会に参加し、探究活動が着実に向上していることを実感した。発表生徒は熱心に取り組み、質問にも誠実に対応していた。 ・一方で、質疑応答の時間に他の生徒から質問が出にくい状況が見られた。 ・「当たり前のことを質問したら恥ずかしい」という意識を取り払い、自由に問いを発することができる雰囲気づくりが重要である。
<p>学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・進路指導課関係の最終評価について、年度末まで閲覧できない項目があることから、来年度は8月開催予定の第1回学校評議員会において、前年度実績等の参考データを提示する。 ・探究活動において、「なぜ」と問い続ける姿勢を重視し、どのような質問も尊重される風土づくりを推進する。 ・中学3年生と高校1年生が合同で行う探究活動を着実に実施し、中高一貫校としての強みを一層明確にする。 ・探究の成果について、外部コンテスト等での受賞のみを重視するのではなく、問いを深める過程や内面的成長を評価する視点を大切にする。